

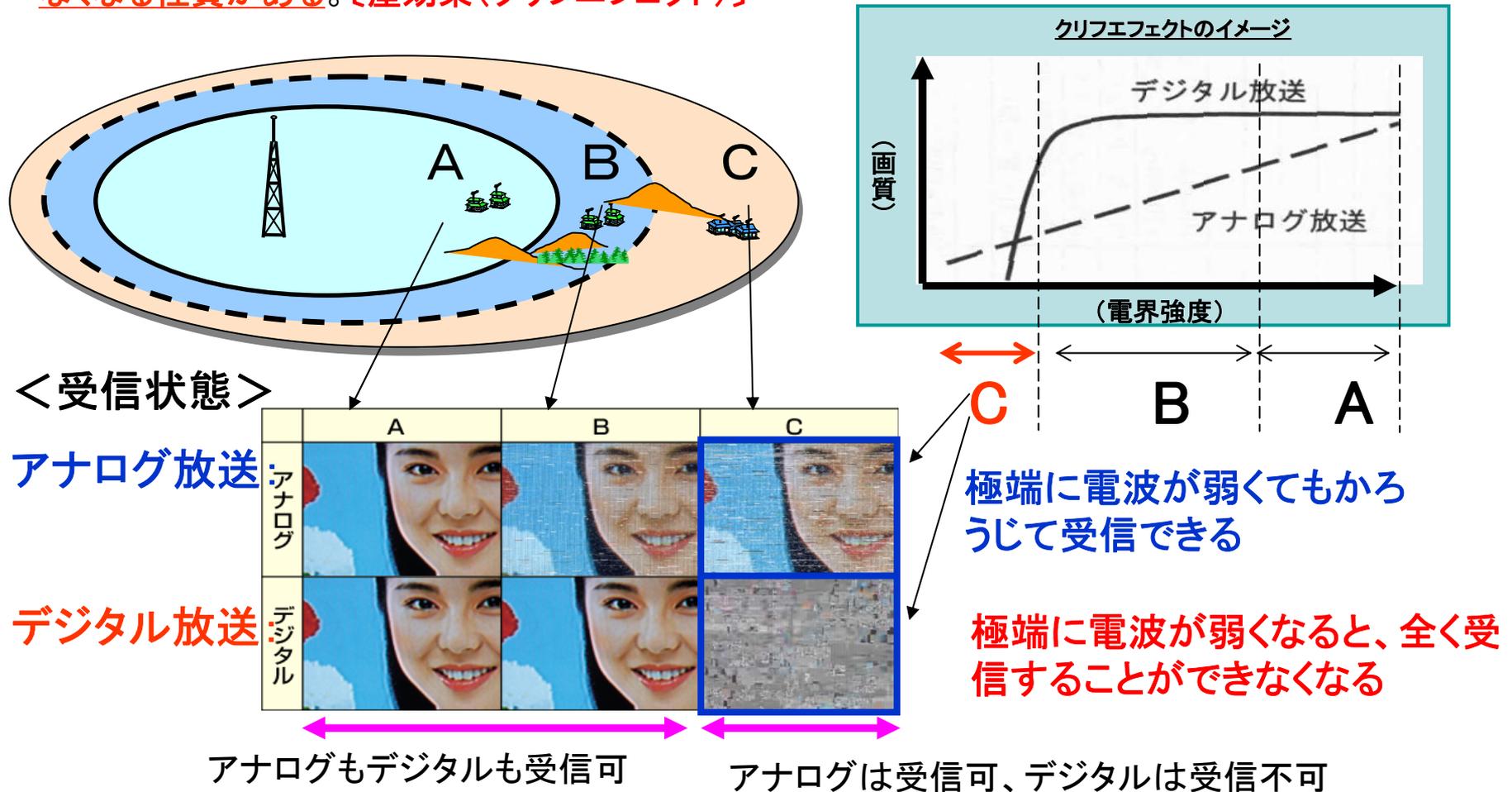
難視聴の区分	アナログ	デジタル	九州の状況	想定される対策
①新たなデジタル難視聴 (原因) ・放送局の使用する周波数の違い(VHF→UHF) ・地形的な影響 ・デジタル方式の特性(電波が弱いと画面が消える)	○	×	最大 28,720世帯 (0.58%)	・高性能アンテナへの取替え 14素子 → 20素子以上へ ・アンテナの調整(高さ、方向等) ・新たな共聴施設の整備 ・ケーブルテレビの整備・加入 ・自治体光インフラの活用 ・衛星による補完措置 ほか
②デジタル化困難共聴 (原因) ・もともと弱電界地域 ・デジタル方式の特性(電波が弱いと画面が消える)	○ ノイズあり	×	最大 12,740世帯 (0.26%)	・共聴施設の受信点移設(大規模改修) ・自治体光インフラの活用 ・衛星による補完措置 ほか
③アナログも難視聴 (原因) ・もともと極端な弱電界地域	△ 極端なノイズあり	×	最大 22,540世帯 (0.45%)	・衛星(BS)による視聴 (既存支援制度あり) ・自治体光インフラの活用 (・衛星による補完措置) ほか
			計 64,000世帯 (1.28%)	

デジタル化に伴う新たな難視聴

※ 難視聴解消はあくまで地上系が基本。衛星による補完措置は暫定措置であり全国共通の番組となる予定(方法は検討中)

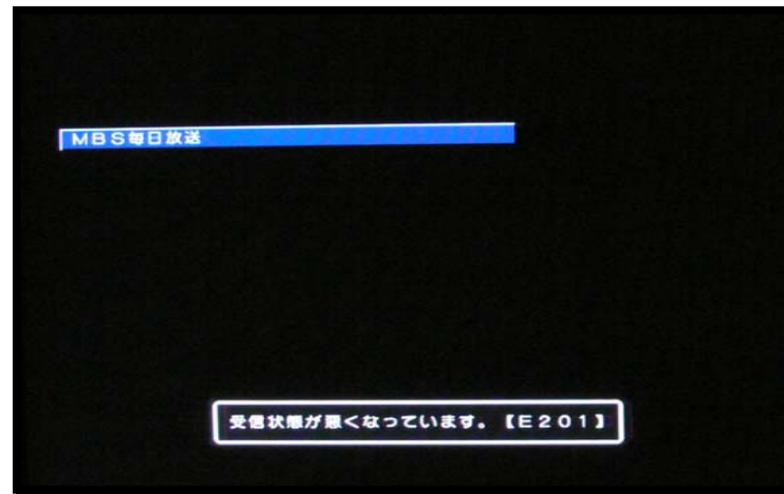
●「新たなデジタル難視聴」の主な原因

- ▶ **アナログ放送**: 電波が弱くなるにしたがって徐々に、雪が降ったようなスノーノイズ症状が出る「しゃへい障害」が発生。このため、極端に電波が弱くてもかろうじて受信できる。
- ▶ **デジタル放送**: 電波が多少弱くなって受信状況が劣化しても、誤り訂正機能により「きれいな画像」を確保。ただし、極端に電波が弱くなり、誤り訂正能力の限界を超えた途端、急激に受信することができなくなる性質がある。〔崖効果(クリフエフェクト)〕

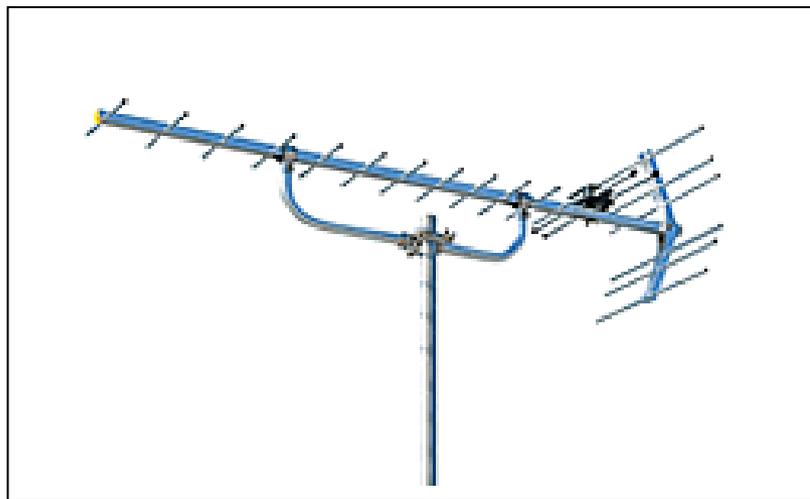




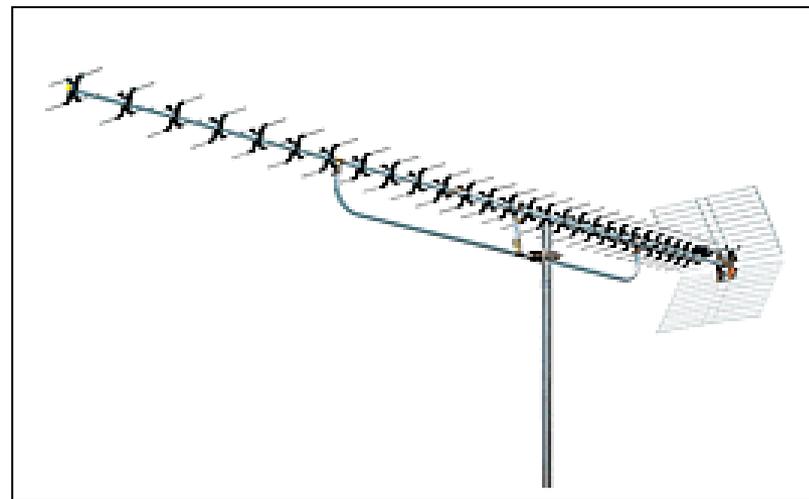
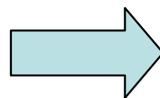
アナログ放送での
極端なノイズ



デジタル放送では
受信不可



標準的なアンテナ



高性能アンテナ

